丹鶴叢書

忍音物語下

093.1
2006
佛教大学図書館
2005495204



まことふゆのつとおほしうそのちかうへ（へのそるくゝ小二本）さてもおもしろいハ
みしうくなるまぬるふやいのなるとこをさまてゝゝ
おもひたのるらんとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のおへハ内儀もいとゝゝけなくふるひ出しまゐに
参しるふたいの品さまの見ふそへくきつゝ拾へハいの
なるこゝろとんくるゝくくく

かたちのやうのよひあうと云ふを始もぬことの
らたつはまへをもんまなくいをさふうつろ
ふうくの海さふそ仕うめさのをおほ（むつ二本）志ほまく
ものなもん入うくうよ志のく其人仕るとそそ
仕るまでくまねうせよとのをおほをるそのかく
志ささもちなとそおくめみつうるおそもつまと
と。（九二本）いともも色もおくさふおまねを始くをそう
おくさ始のへとくなるふぬまする所くとさそう
をと二本
ぬまとのへる所そもへ（十二本）ほまなとそるふえほうへもおら
そ孫いをくさおもも仕又う（人目一本）の世ふありとさうれ

忍音

ほんも中納言殿のおほさんでも（一本）ほくまし（人目一本）もめん
くもなくさむさをしのるくそおをあうくめうさふまされ
ぬおむーさのぬまそ美さむまとてもおものくたちそい
くおのさんとふ仕とおの（も二本）志のそ志こぬをおくそていくな
あるくさんもをくねをおこなひをもせやとのみ
おほく（せハ二本）内侍のおのいなくさもるむうめくだく
むさむつさくう始へるふ舟うくもこるへあほひく
内侍のおをさんとう始もうつをそそいうそおお
あい始（ほゝめさぬう二本）やく人のつくさをおりふこそをおもーた
志とうせめてそまま志と始へやうふとおほそさうくのへ

小そでふたてくもも（已下十二本）川のつくかりてをてをおそろなりてもの（已上）
ろくのりいのにくとせめさをまへ（内佐もろ一本）ハ内佐いまてくよりの
石をとうこうくもものこまへるとうしのへ（中せ一本）ハいといぬ
せきことのれとくみつてうつなのえんなる
とまるおとも（る一本）ハ（内佐もろくしけもて一本）あうへハこのくまえ所几帳おし
やりくらんをれいくめさきのつさくねを
るふこそいのふいとあつこうなるおかまうつるさ
つもおそよるもいのおさくそんことてあつさくぬい
とうつをこ旅へるこんなのこ所やとくさぬ川のけ

忍音

所らんをこハかこのりへもをこ所をみくいとおの
のひうろふなのれまをおさおこ旅ひくこのれを所ら
んをるふおさものめ（ミ一本）るとおほそくおこ旅（えハさ九くこちろく一本）
もぬこのろこのむさあてやふうはくさいまうふおさ
をうちおとうの三旅くいまうて三をおとやるの
うちかしのうみさこはる我おこうとくやこまるく
所んうはろひく行ことをさまておほ今まみそ
こくおふおもやとの旅へいとまうくく
そなこのもう三おるを所神ようちもひ
いそいのふまろをさへなさぬらまよいむのる

そのをとゝくとふのくさなくさもむさゝもあさ乃のまたゞ（たまくさとも一本）
ゝ詠なくさもむさゝもをおほまつらひくいの
なる人をおいむまらむかさゝひそよめるまひなるま
このかまそうを志川と於そ一おそゝぬ人をとゝみ我のさ
くるまさとおゝをとるれいおめるまゝしる
まやとおいろのおふこうそゝくくをむさいい
斗そくなるなる人ハさりやあおふくるまやとくもくるれ
もかつせ於らくもなるいのふをくさおとおほつ
らいくないまをめくせ人よめまかつなゝみくく
ものらいるさまあるをさゝみおとこさかくせさゝ

忍音

今ハいのなのうとゝもなくさもむさゝそゝさゝもあさをよく
いひをまくよゝおほせらるまハさ斗そゝよ所ふうつろ
ひかゝうとゝんをまさくまつゝうれなくさ絶ふかよひ
とゝんをるをかれなくさめふこゝとゝまをそ行ことを
おくそおおひほまさゝんそこふきつぬとゝうらまさ
この世よとれるハんよいまとゝひ侶ることも侶らねハ
みつゝう又とゝそ行ゝうまもなふうちへらんとゝそう
るふそのあまさ中納ゝあまるのおゝひのなくさ絶ん（小本）
かねくうちつゝこゝふたくそみひうとゝてゝうめおゝを
るゝふ表日ゝそ行ことかるふをあまさまふまさく

ある日ふえ。娘（うち一本）ここちあるべきにはあらねどもまづめしてきんたは孫のやうなる人とめせいまるるまふまんたうのうさおまえものはなるしいともかやふむさつくろひ旅へとみつるうのくさ。ものおほしるさまふてとも
をさにはなるめうちしはたくなることをうけまん所へあやしくおのころもの（八一本）ものんほそくふゆるはなるたくふいあらしく仔ことなるんとおそふそし此我んかくる（ナニ一本）（をそく二本）人のことをやおのふらし。（ん一本）（本ノ）よいまされハいとろちをとそしいやうなるこやあるん一本）人もいとうこうらひきほこるふそしあるめとろれおさにはらひもさとかさかや大将のむをめふさの次のようなるとさやう

忍音

のくるさふおちひらんしくるの内ほをきるくよやまのふ出てるんをしさもあるふをのひるらふんいおろろそのしるとも女なるまふ中納そよいのなるそそうきやうてもきくひりをちちそをさ又ちの人もをとくろ乃んまのむめさまるさをいつくもてなるこ。（九一本）おいろうふくまふなむのめもちさうふのくふをとめるふこととおほしるふ。（九一本）松このうあるさる所らんをいみしくちそおとろへ（九ひ一本）やをちさくれ（ケ一本）さてもみまふしさまの老くるこそにるもくさこくにをまをおへふのうちちおよふ乃

あらそふこんゆるゆるやといとしもおそきをさとくなるこころ乃
おもひぬさいさきやいのさまおもはゆるこころをあら
くるしくゆらんしくおもむをしいとゆくもすきこと
おもよゆくさいなまのしくけさくおもゆくと
ぱとうはくとみなまるよぬそそのりおへなむ
きさてうふさそのよさうの中将むやうをみてと
推大納言なともさふしいまよゆくいもゆくあしく
なつりくむさなるさせおよひきのむ称の君ぱ中納言
のふそとやまきまるへいそろまものなりおりそ
ねのうちおのうきぬことのくるくるくりのつさく

忍音

ふつまそそくゆくゆくいもゆくをさくなるこころ
のもの称のうちふ中納言のふそのきほとなつり
さそなおうをはるうやきまをおそやあるしく
おおるへいさまそそひとをきうしひるふそとといと
まつりくくものいもそうつふまへなをそうと
おへるふやとひくとふまよりつくくしのそう
さくいまなのくくいそもうやをなくいふその称いま
そしめてそくなまよもあるさまそみるもふしくと
どいやそそをるへいともおくもきそおそそうゆ
さくさふうまるそくんけさくそんよくあく

さることをもとめんとするなり　そ
こふもつぬかよひのうへ　重てあるところのよい拵
うえて　守をおとまめやうのふこまを　せ給へハさのごとく
なるへきなれハ　ほ世らるもかてけなくてハ
まのまゝやうせまいとおもへとなをきゝ今ハをふ
そのことをもてをはらいとおひのへいく　姫君よハそらつ
のかきおよふおほなりくうの所らんいく　侍ら
とさのごとくなるとをまを給ひそいとうるさ
なることいおほさんやくいたとん所うつのうち乃ち
ゆきくいうなるもうんよりおなめ給ハ
忍音

ぬもめいくうくうなひめくいとおんなさ
とくふもとおひ給へ重てあいらんとうまへ
おもふ孫七人のかくくなることもおもふ
ふまいよいく
ふきりいと給へ母うへもいとうるさいとおもふ
給なるくんのうちとひやるふかなくくなるおふ
中納言もおきたんこ侍くもおををいをもあるもの
さふむかいさこそのあとおもへ公なうのいくさを
なるくものてもともむいとの名もちむいと音止と
さいむのへ殿のいくへおをせとくるうもくおよ
そむかのいくくまいかをへまるうさまふ

いとくちをしうやをあをとこのくるをとみくるしくて
即をいなとそうへのもとにまかなよやうにみてもとめ
給へとさらにたゝまをかくうちおさ給へとそ給
くるしくくあまた人の即ゆくへいまことをのをとゝ
やとさもうへいをつ称まくることのなゝ也とてのふしく
ものをはるんといひもあへ給をとゝやて即おとくみ
ものをはるんといひもあへ給をとゝやて即おとくみ
給へいとの名もはくくぽまをを給ひくも名いは
くへおもりけるてあことをとゝとうはるくよあの人
そまの給このなくんをもも也てるるこさかとのくきへ
うちうもつくくおとるのをの也てとよ人々

忍音

をかよとゝ給なゝ也こいおそゝこゝなゝくへとゝ乃
ほゝこのおをあるくさ多ふもあるぬをとふく
ふむねのをの也ままさるるいとのなゝきせめくのん
やり所ふ川つゝろひくゆまをを給へまをうのさ
くゝ也とくふも久也こ即おをいあるくさとゝくんつ称
たつ称おもりまを給なゝ也こ即くさよくく
久よのそゝもくのとゝも即くんをも也てあゝふふあゝ
そゝやをくゝとくいとくなるまをとのゝくうちもふる
まみくゝもを給さなとを即めとくめてまりゝ也てまよ
おゝ也ふをゝゝもおゝ也てゝんをゝゝん女いのなゝ給ちよい

いとものさなんといろめうつしを師くんふるをさをてごとを
すてゝ所らんーむーく

人とをこゝろにしをとゝくをこの神やをてなるこゝろの曲ふ
清やすこゝらむこゝろもちをむーおくらくは納こゝのこゝろを
みおこさを於へる所まつをのこゝろのまつーけふをしし
うちるまものせるへ(こまるをらそる二本)ハ我こよくんのうちをつるこゝろゆるふやと
むこゝうちあるむこゝろもアーこゝろこゝもをつぬやふふくさ姉
らふるよ所おそむこゝろ丞こいのこゝろのひ於てーにつこゝせ
於いくゆえこさ於るよ中納こゝのいつとなるこゝろをとを於
さこゝものおふいるこゝろのこゝをはるふをひおいをる(と二本)
忍音

さなのもちおおいいるをこゝろをくかうこゝもくさみ
於へうーまふふハものこゝひせぬをのこゝよ人よかこゝをとゝのう
こいとゝのかこゝもむこゝをのこゝろ(すー本)こゝをはこゝふうるもる相
をなこゝうるさ於いこゝもゆえこゝをこゝせのよ丞こいの
めこゝともみおこゝせをはらふくのこゝろ人こゝをまつて於へふ
中納こゝをこゝもちおこゝまつうくなるめおうこゝ於よをよ
こゝやこゝてんのおこゝろを仁こゝ彩こゝやこゝふこゝやこゝまつ(十二本)こゝを
人のものいよこゝをのこゝものこゝくふこゝさゆえこゝおやーこゝく
所いのとの此こゝふはこゝをまつるもゆえこゝぬふ此所つ
ほ於へこゝろくつこゝせのこゝるむこゝいなとの師くよこゝさ(いろかる二本)

るうさ(そ一本)ふとおほ(おやゝ一本)つのなるくやをそう(う一本)もちて
なかくにうをのりもをふくもものおのなるもてくるもて
ものそよせものむ袖のつさをぬそあまりいふをさ
るさなるとさ(よう一本)とまゐをふくとおもひ給すること
りてそといあそる人のもそ八ふいのもりの人
ふのんをうは(つゝ一本)給んみるまふおとそうはさう
はくてさいとのなくにおをさをまろう女なるまゝこの
志やうとのむるくもるとも此人をそ給そもかるへく
ともおほそぬさまのさてるをなをいくのなるうおいた
かくまくるとそ給よそさるとこいようもさとまろ

ハさやうふとものハおもそ(せなる一本)ようさを(とん)はぬくこの給そもる
所こをのやまもとハなほおやゝのさやおもひてむま
をもとめ給ふふもくらのそをふ志のくにるあれ乃
あるとそもゝやこゆるとみそさるよふう(されハ一本)くのおそゝま
も(おそそその一本)おくのくふおうれのいくうにくむさなるくる被
くちもあをそむくまそさそまよ(そそふ一本)もみのをそのうち
いろうるそるやうふくはのゝくさゆるくれとおさく
のふさそ尺のおうにてくるいとのをもあやゝをふむ称
うちさこれくなのたちれそてまをを給へ此人を
所むさふもをさようせくちほうゝくらつよ(ら二本)さハかうをく

いとふしんなることこのもしきかくれ人ふようまうしてなどもめくるやめてまいりたるもいとてそをとてうるさきかとおもふるのみをおとこのそれとをうのほふおおてきものいうさけふなくさまよりあまりもあつきぬをこれそのよふもおかしふもそてそへくさうにて陰さへすみいつるをなをむうのめよやこめをはたうる(おしあつ一本)てかほふ神をおもむくひきもそるくぬいいりにうふはたくさのまさるとうやいとそとそとそとそとそ門のをの人もそもあるのそのをとそとそとうきそふさらふいそんうさ(うはと一本)あさまよりくものなくも

恩音

おほそそこさきもちるふふ(ふる一本)なをもそたてまいるたくさおもしやあをそうくそあくらをおそくまお次まくたちのくらせるひくいもんのくなさまおそうつうのさくうそおくいそおそもこおくくおそ(ふ一本)かくくあるすとおりふなはほうくほうこうるおそ(李)師くをさるくをとそそのふみあるおもものけのふしきをとそ又をちうもおそさ終くふおれふくく髪乃ゆくくもさ次なさまのやそうもくくもなのくさ終くるさまのやそうもくくもなのくさ終くるさまのやそうもくくもなのくさ終くる

もみかまさまくさてそなのくもえんのさもくく
せふおくむさちこそをねりへなさ月のさここの
をそこととくくよのをとむさくく四のそるもおそくこも
をそそくと時よなもよう終て申納その君とをつる終
美かもとへよくぬさちふとむるをむのへく
さてもいひやるこなさ所くのはくさそをとへ学
うこれさそるそいのるおとをおほくよるともまく終
ふさてもいのなるさるへふくもとてよつくる終ひくる
そとくくなさ終へいとほくくく殿の所のくようこむ

忍音

志さ所使さへつそいのそうくはもおそくまく亜
き内なくふさぬくひ終よをもとをもさをはさくくふれをう
そこもさもつのそくかも大将とのふつてこせ終ふと
うもをのそうしふいのそおくる終のくをまく終とん毋うへ
乃所よくふのこのをくく当所つをお祢ふさのむくいくをのよ
をうへほのこのふんをさを終ひくなのめなくふほー
いくる至こふくみつのう終所そくさいつもうもるよよ
なくむうくのさうふさまぬむへくもんとのこなさ
おそのまこ終くぬおさそをのもこいまこそ終ひんもる
もむなうくぬへんほるとくくさうそこもおさそうそこのふの

おもひをおこすこと一本　いのち八本　孫八本
ながくゆめも入給ふべき申納を度乃ちをふおもひまゐ
らせ候ひしる所又なるとも一本　なるとも二本　ひのうへ
ふよう一本　乃至二本
乃給ふよう共ともいひとうけ次もねうちさせ
せんこともなくまつかくことくしくことをゆをも
秋よもあらばのうへ

うちの空ふあらしの色も一月うけ八本　はなか二本
なく新やこをるんくようにほうるをまひいもよそへて
いとうくとそのをかき給ふ申納その名もいのち
所くんをとゝんとよやるるうくのつゝせうくいのう

忍言

きくことおもひうちふふ今秋ふおきてんのまうみを
給へるうゝきこゆをとよさむまふおもひいく入をる
をおもひの所くん乃申なるのおもひそる毎ごの時を
うゝみのつをおくさんもおなくつさせ候おそせさ
つゝ日ようゝなるゝのおくまてもゝおもうくく信
ゝとゝいつふいのくゝ信るふんとふ所ゆくへ
乃をうるまふりふ今まて世よたちまふ心の申いの
もおもとうおほつるさゝとおくてさ姫ゝいまくへも
さくめてゝいとめてくことのるをゝふれまつるをくせふく
おくてんうゝきゝ。厳もおほーようけめにのゝもけをむと

つなぐぬなくおほく今うくの所くふきこんぼ
ま（もめん一本）ま（ま二本）ぜんうくねこしとこひぼまるつくのおこうまりを
おかりまるくて所くよおそさせのくうつのくふ此せい
くうくなくぬいよなぶまもちその古語をもおきうち
ふまとみのくまくこそかくこのくめくんのくうりおこち
ひくぬくふすくくき道よおもむきなぶ九くんのうて
おふそおなくもちもその庭をときをてまのもたてまつく
んぜまのきいけさん一本いろんふをもおまこそのさまなくぬん
くぬくりおぼくうまをくさふくしつきぬくへのくまよく
ちのぼくさもまるもいよむんなきことるふまとつゆるく所
忍音

くんとをぬおくくんもまうくふふうむとくひい行のくる
かくまくくおろいはるくそやいのるる程のまみく
ら所ことのつをまこのくさふ称んふりもさもる程をきと
おかふこそかねくようんつうくまくいむはくくくもれるくま
まくも姓名の所くふ中いくこのなくく。涙ふむをいむく
そのもお称きひく人めつまくくまくそおうつくふ中納う
とのふむくまのよふりふやうのくまぱなまふ内まくまを
もまなのやふ今めのくきまくおぼくくまるふも所つ
ハきて氏ものむねの名ふのみ所くんをはくさをおくく
まの次姓名ハ中納う度うまる程くよりハくう

のおもてまでをもおさたよまのうちをわけ内儀なといいとむんなきまでるうちとてこそ女房二本ナレ一本おくもけしきをふとの供ねめ二本ナレ一本くもてなしくおませよとよりのへ母ふおくんとるこそこんなきふでもおもも兄ほそくいりれるむまもあくみをそそきおそしくやよなほして中納言の君ほいのむこのおむゆくもいのしふすそそれてもやらふもさみるへと何とおそやうふのおへおほしやうひるるしとお波そそ所うう波むのふそのなりふ君のよしまでまふこ口つてひ

忍音

侍るさくさやうのもおりへにこそはまこそくまをいかくもをしくまをたのむへさもなくもなさぬめまことよ一本

このおくくふ一本よのまのおくふ一本ハナレ一本

湯をふん入おもわねも一本ぬもも一本

せぬこのこころめしくおりてのれうくのこころせたまふさいよくうはしけなるさまをもんそさてまつしくおこのほのりへもおもう次うみよむふてもそそくしおもやまを終へ母なのくうはくさだくひおをもいふやりまるへよもおほうむさてほし中納言の一本そふうるる一本

内へまるるこころくうへをみをまるふはてても

こひよりほかなる事をせんのおとは（えをもおもふ）
くくるまくらのうへ（一本ハ）
まもるとのふおほめさむといふもそらごと年あ
けぬとて春のむめのさくといつもいひてきくのとやう
なるふも（一本ナレ）即くみもなしもとことおもはせて
おもはぬくもめのみさまのそうさの姫きみのおと
せさつさふ仁行となくはくものをもの狩し浪乃
佳浪の内佳をもそのもふきたのうさみなるさそう
みくよるなくまう狩よとそなるもうもうくく
おりみくんとおもをみくきをいせん所よく人もなく
うちなのそんおなたま（一本）ふるふ（一本）ふるふ
忍音

いくうつうくみ狩くむ行とやくむものんほそくて（そ一本と一本）
せよたちまふ屋くもおく狩んくうおのうくえをを
ごきせ狩をめとうくみをへきをうかくのつくさんな
くかてうもうくひきるもふくうく次志のきをむと
おほしくや（一本ナレ）志うたきふきくえさやう敗乃
うくのめくうふきをきくきも姫えをいくおり狩くふき
狩へいうへて出いのおくよおそうまくほさをめ即々
しきをおうらへの狩させおはものふよみそのお狩ハ
きをうそきくきもを狩くるやとせもうてこきせきまへと
なのみくのいくへ狩そんうちほおくおをふるふ即つ

中納言殿うちとけもおほよりてさなくへとめ
くる(一本)ほいとうちへとの給ふふもよきやうそんへと人のさも
ふとまるさおもしゆふこそ作もおかうちさきこゑ
まろねのよみものさよかしこまるさくさぬらよちやうし
そめ乃かをとふのきを可なほしふされやうなるさしぬ
さなるいくものこいよやをさまへるしもいとしもかく
うはくさきものなうへ八女房を引よせ給くあまこそ
給へるよ(一本)ふとまるさぬもさうなるあるさまのれさう
ふあるとなのさるへとゆうさる人かほのおもむくもく
さらしめしるふこととんうくく所狭う後の落

そまいるをさるさんつねいとみしくんをさそよまいそさも
ふさをて今のそうしふ行よくもとおをさらるふとそ
うちうりこまるさくぬをといとおりし給くふさまよ
うへしめさみ琴引おせくさそは狩よあをひつ
んなとそとさくさやうの(一本)給ふ中納をそふのう
ちそいやるふもさなくふくこそおをふらめともむねも
さ河うなるふ(已下一本)ちよひのつとさそよもさうとそうへの
ぴ(一本)ふんさうんと(一本)もくんおほしめさんとおくんぷ(一本)のさ
さそふをうしくさをもちのまをなとさくたちぬるそ
さ川くなのさをのあるものやとうのめのさせる(一本)まさへく

忍音

なへハ姫ごもいとあそばしておほしたてあるゆもとゝ
まのうへのみふ人ともおほしなびかしまるふことしめて
きこえさせたまふにこゝろにくゝはづかしうまつる大将殿もおとな
ゆきさくいとなみつゝ給ふよまことにまたいと
とも大ぢまの後のむつまじまゐらんほどもおぼさ
るべくまめやかの心ざしふかくおぼしまさるほどあ
ふさとにもてふめり給へるあやの君そのおなじやうのかゝる
をおぼし給へるにまた今のくにかさねておほめり給ひそいと
このきみつのみつきこえたまふおまへの女房をもち
ひのきふもおいらるゝふもまことなる御心ばへのくかるゝひとの

忍音

ようかくりはてたまふなんとさくもおぼさぬ
あるやうなるにとも今をかぎりとおぼしたるいと哀なりさ
く殿へおはしまさんとて川つゝろひ花やかなうち
そゝき給へるまむきいうにをもしろくをもし
ろきほどにまゐりたまへるを今をかぎりと思ふ
ふ後のおぼえをまことにてさふらひ給へかうくて
所らんとくはさせぬ力のおもてさのまゝそんとく
をまことに作らるゝにいとものへまゐりたるの御ありさ
ぐくまゐるをかへりてはるんとゝゝろ給へそこゝろやは
くまゐるのさまをかたはらいたくて鞍馬のくらへと参りたまへ

つとゝのむ　くゝるまてまつさゝらもちはくゝとのふうくゝを所
らんくゝさゝふくゝとくゝ停らゝとふなのさゝてのまゝとゝ添
めさゝぬそまあそゝなるめんたゝふをもゝくゝもゝ
かのゝはゝを移へまさゝといゝて移よのゝ中たふも
こゝまゝて加なゝるへゝさゝをなのゝめもゝくゝものゝも
おゝほそゝまゝぜゝふゝゝひゝつゝさ移へ所ゝのゝそゝをふゝくゝかゝ
やゝゝまゝくゝさ姉ゝひゝまゝとゝさゝそゝいゝゝゝれゝかゝるゝゝ
るゝゝくゝへまゝくゝまゝゝゝもゝ女ゝゝ身ゝを心ゝまゝの移ぬ
ものゝまゝくゝゝひゝのゝなゝるゝゝゝも又まゝくゝゝいゝゝほゝいゝなゝるゝへゝ
所ゝんゝとゝなゝるゝゝさゝもゝり移よゝとゝおゝもゝもゝまゝそゝゝゝみゝも

忍音

まゝるゝ一本ゝゝゝ

きてしまひて今一度殿の所のほをもあこをもみん
ほらんといとよくすりて筆へいあやふくきてまつ
いたくまるくもちてくおもせよとてきてもものおとも
ほそえは本細ちふとりつきてもも江に筆はくく
るくもなくさせんうなくとすりてもるいてきある
ものいたくまてもあよそふをきものな江てもあ江こを
いて絵ほらんとくに所もすあよきとおさるよいとの
やうとおもひ筆へくせんくうなくくきまくいもきて
なくふをきてくいひてもものよへきな江をとこくよいら
へまよほとふ我もはうさふもぬもちくくなくぬ

ほとふ出ほくくほいとくに所むこふまるらんをとくく
をるもあくくなほてそいとくくるくかくむまるこさそ
くく此まるあるへきおくさやうふよういくほくて二本
まのことくくいひをくへくもるよめんをそもも姫きみ
おくう筆ふをんつよくそおほまきかちくほとそ江こ
をかくうおほをそひのをの月そまなきふをそち
ごまりくく筆をとくに所むこふまるんよとて所この
ふをほくくとんに筆へいみくうなきそほるに所のそ
乃いよくこのるやうふ志筆うゆくくほいとくをを
おきやとくかくものおもせをてまつるへき筆と

久んもそせいそおくるほそいのなるむすめ乃契、そく
身もいとつゝふなりぬるおとこをさそひもてきたり
てそのよくさゝふいてゝゝ乃と毎おそれ姫君を
ひきとゝめおほくまもり給ふ程に月ごろを
けるゆ納言を殿へまいりてもとのふ
引つくろひ給へるを殿もうつくしきものに
きこえおぼしてまいりたまへるを
とまりたまふ乃よなをはひまをねらんと
心得おほえ給ふ君の行ふえもいはぬ

忍音

きのふそめもくさてかなくおほさる我ふるへ
く所多の出たちめくしくふめる君のさのふへふとぶき
給ふなゝきのもりもくもしもそへ給ふ
うちふふ給ふおろかにおもひをるもんのふいへ
めくへ人ふ多のひくものへまいりはる出てとのふゆへ
も所うまふそうおもなをくものちてまつる今一
度ゝの君のまいりくしてをそうく所めおとお
ゆ給なをおくおふのくいともをそ出ものへまう
はる日ゝをもさしくみるまゐりをいとゝくふ出ふの
うちゝなるくふもおさゝくふのふへはををはらん

らめとく。やがて（一本いふも）一せるまつ（一本と）きようをゆをそゝぎおろいとの行ゝきみの行ものゝめふりつゝひをそゝのふへきいとさるまゝにたゝみつゝ男まつくゆひきらめんをもゝめふりそゝめけるゝことゝもゝへ候ご月のゝなゝとそゝゆめ〳〵せい〳〵終よゝもゝのいまるまゝゝこの終へそゝけるの色ゝもおゝ候ちゝのゝおよもゝくゝ候ゝをそゝをせるるてんこゝのいとゝそゝなゝらひ〳〵終ふまよさゝをゝのふ後のさゝきゝをゝもゝくゝめゝもゝゝそゝゝまゝ八たゝ。終（今も一本）そゝのゝもゝひまゝむ〳〵おゝもゝのゝそゝみゝのゝゝこゝおほ〳〵せるふゝもゝよゝゝく。後（たゝゝおゝふ一本）のふゝをおゝはゝをゝいゝむ〳〵ゝをの忍当

さゝをゝこゝひまゝ〳〵るゝふゝいゝのゝおゝもゝんゝとおゝほゝのゝ〳〵くかいをゝゝもゝ終へ。夜のゝ後ゝもゝ候ゝかゝねゝくよゝのゝそよゝいゝ〳〵まゝやゝそゝをゝるゝさゝのゝみゝゝゝいゝゝさゝゝをゝ候ゝ〳〵それやゝのゝなゝる候ゝそゝゝふけせのゝみゝひゝをゝたゝきゝ（今生一本）ゝおゝゝりゝをゝ終へるゝおゝとゝもゝゝるゝのゝへ〳〵をゝもゝよゝう終ゝゝこゝ後ゝまゝくゝいゝをゝまゝかゝこゝをゝみゝのゝさゝくゝいゝほゝうゝのゝりゝし候ゝさゝゝもゝをゝそゝふゝゝさゝのゝへゝ夜のゝ衣ゝよゝあゝさゝ乃ゝをゝ古あゝこゝをゝそゝん（十一本）ゝもゝ終へゝそゝ栄のゝおゝそゝふ竹のゝのゝさ松風ゝをゝさゝのゝおゝとゝさゝもゝのゝ〳〵くゝかゝうのゝそゝをゝそゝんえゝおゝれゝのゝをゝふゝ〳〵のゝくゝるゝさゝもゝそゝ老のゝおゝとゝろゝ收

いひなづけ（二本）おもほえず（二本）つきを（二本）
そでをもしぼる（二本）夜乃（二本）ふかゆくに
きぬたうつ（二本）ひとも（一本）女房の（一本）
おもひやりつつ（二本）ねぬ夜かな
おほいとの（一本）御供（二本）
おほいとのゝ御供（一本）
おほいとのゝ御供（一本）
おほいとのゝ御供（一

うつなりくさそよおもへおもへるものやなとやうつろふ
ハもてせさりしてとゐおもをそそそよまゐ給へを
敷もゐるへてとおもも何ふらんきいのふも
世ふあをこの水ともようくおそ大将のともおもむ
をもちこのおくいさつふなをくへさてやおめし歌
乃ゐてよそなのりくゐおき給よことおきうしし
さて姫君おのくをとの給ひをまもちるへとうんと給
そんをもおうまてやおくんくゐほめよあ此文をも
ちくまゐそそるてゐをおそくそまゐくのを
ともおきく

忍音

をゐの月おまゐるてをそそてよそとおそ山乃
おくよいるも

おめしへふのくをとのままひよもむみよつる
人のおもも宝うちすてをまることいのたうめくおゐ
もうんさをとおりよんあをとそおふるふもおほ。そ
今ハをそ所門の所ふたのそくさふくへいくく
乃所のをもまても汁くなをくおそもまほ
久をとおもこうことをとよゆをそよおなくにくをて
えおをさもにて給もぬさまなりさりもゐまもるい
にるふめもくをとく此文をこのよおてうちぬく

そのまゝおもてもあらためずくもをてまくる
るふかくはもゝ（ものの乳と八一本）——
小まつこそるこのあるこゝろとおもさるにに人めも
もてなしなきものりこゝろさるよてゝは納そうせのい
ぬるとうへもやゝしめしてまゝくせの出うをぬる（きえ一本）
とおほなその出ゝくひのやゝくものゝいはるさまの
きるうしゆゑとてんこもつふおほゝおそのの（るゝ一本）
ゆのこの人もまるこ後くこうあり人のはるふ
又大将のおことをおいものゝ後ゝようしくゝひのそ
るゝおなのあるこゝをふけ人今へもなくおまのハ

忍音

おやいうぬ（一本）ゝかくなりぬこゝそうもゝをれとそうし
宇治ゝハさそれこゝて此人のおなりふもといふあそこ
ふおほゝめゝそのもゝいのはゝ移へまゝ生ゝハ川の
はゝそくまるもあゝゝ今ゝそこる有もおくうもち出
くゝ納ゝおそうせよふ出ゝのふかなゝくおほゝらむ
やれもいつてのいそまゝて（のゆまて一本）もゝこゝまゝそあゝめゝく
おやいおそゝなゝ出まゝ移なゝそいのあるいけの下
まてもをろもゝおゝ出なんとゝくゝりゝもりゝる人も
志のゝ移もまゝゝ出ゝ安ゝまゝくなゝさる人ゝ我も所なゝさ
乃こゝ出こゝいほゝくゝ所ゝんをまゝ今ゝ此ゝゝのせん

うくるものうもむとおほをそさのこもいのしくせいふれ
ちそそ一本
ちのそくに教ふるまのふいよくなるさもろ玉てるくにうへ
ひてうせるく今いいのふおかふともかいあるへきこのいちの
らなのさもいてくおやひいるしくおそうせよのふさちめうよ
くるくさふ二本
てもぴかなしさことのれてなしかくしはくお月よもかぬ
お月雨をたうともひまかこのもうのそ称いはくおかひの
うさくさうそうそと二本　なほうち一本
まさうとくちひしさ人をゆめよもふやとおもせた
まとろまねいそもなしまろ名をなろと毎いのふしく
こんるつさしてんとおたなるさくろ此をくりあふきを
ひてきこのくらみとりらんしく

忍音

うさく人のかくこのおふきをひくてなるさをさ
そふ風そふきさそふとうちなのめくさくし後おいい後
此のうく日ふそんくおほなくさもよかくなるさもひのくと
もかひおしまろ名い行とてなさせさんとてなるさ後
へいいく後もよふきまこくせめてとくしりよふうるくう
しく内へまろせくせ申納さくおもんとおるくまこいと
ほきおそよしのふしおうその井納そそそ後そ
うそもなひのへともなるもおうしおかきのようも
出いおもひしくおほしまそよかくおうさこはさ後よ
心法のおろよ行後あるそひくまき墨深のよそてかるく

よもなくさをさへて杜よもなりぬくものしへのまき
ちーもいろ〳〵まんゆるもかく世をそむきもりへ
きもーめふこそあるーー説峰まくんそそんーもかの世
もあるの英なるーー收おほーそるふきて今のこちら
ーーこ也ーさもあるなーー所つとかくんをとそ
なへへもさるよそこそのほ迄るもーー終そ仁そ
てふそのらーもる玉こぬおくる春よなれもも姫君の仁
おもひあるへくもなーうへあまりよけーーぬ
こくおほーく切るふきてはる玉こくまるみつくの
くよまのせていとつのむさをひるくさいともむくはなきつ

さこのふこるためーやいあるまゆのかくんをはらーをる
おてこそいまるおるこそ四ちとーこと彩うあるもさやをき
そそなくんをこるふさふなるきこのこさいちそうとう
うくふくーとりふんこよや今小中納もも彩よなそ
玉いもかるこさうもあくほくいもぬそこまめ
やのふはらーとおほーくこさせるへ所かてうふ
かくーをかくおほえくはる彩へのへまくお玉こほらう
なくさめるるみなかくお川こまのそ母うへもこつく
引くーいつもへまあるなんまて一和よおそまさん
さくほそよのはるのみくみやはらのへもし終へ所ん乃

ゆのさんほとそうへもをさふるまおほよるまあろ
しまつまねそくんのへとやうくよくそくてしてく
おそくてもぬこぬ所をめしのへさせなとくく
切伝つくひまそくぽまねそ給へいうへいとうもてしく
おほとそうへ内侍よりからせおそほしてすそ
ねそくておそしまひもの内侍といまんとそもも
そうせ給へいまさ後の後さたちくまうつふさ
くねるへいはそひみくたそおくめてみくなそおと
をそいもなるまてそくくおくさめ給へともきく
もりのくもおほとくゆくさもも

忍音

さのさ人のんをはくさせのふてそいとうもあそ此こと世
いそうしんよもさのひくるうきぬ今はそうまれ
もとひまへうしくよまそる人は内侍いのなる
そそやうへの所迄せぬいよもんなさるまそとの給
く内侍そ局へおそるへさいの志の記称もやてまて
給ふ毎うへも。今は我をおそさそうへの所くふもさうひ
さまへさのさおやふんくそもいとおさせのひそうせ給
ひしは納そ後もさそそうかへしの給ひおそうし別
記本
記一本
もよりんをさそもきそさもおそうとかんおもひ
おそ一本
そうしてもも

記一本

おくつきをなどはおろさひやなどさまざまふさこそ
終へハ四つのつよもけもともそおのへともなをへ人ハ女をそ
むき男をやはらかなるもぬさまふるまふ我男
ハはらをなくく人よりんをもさらんかとのおのくくんも
ゆのぬなるへ〳〵やう〳〵そうちらへらをとくおまをへ
まゐるを終内侍ゐさはくろひなをくくんるふいとく
うはぬ一本
うはくしくものうそひくうへのおほうおんもはをひるふ
おのふなのほともををとて後のさまをみさちくんとうる
うち一本
作りくへもを終をを出〳〵くをおをを終をそ此
君乃なくさみのまんおをとうへくろ川の御おそひ
ふ一本
忍音

りろさおくもはくのふ仁月をさを菱はをのもち
さおまふおもし後をそ俗の志の和泉の内侍おおを
終へと序後をむ〳〵おをとて菱山水の七さおまふ
あををさひとへうさもんのおくさぬあのをさそまおもん
おくなるをとさ終へてむさうおくよもむひ終をぬを
ふ内侍ゐつくろひさそ〳〵一本
ほさのくハ一本
いとうちをそ終もんと内侍をはくを終ひのふおまを
さまよをいまの世よおまたくひある人もなのう勢
終むし仲納をの御いもうとをはくをの序のさおを
そ安よハう新人もおうけんかうへも老ほしめして
まるなるう姫人をのをとうをいあいさやうハちまよ
いふ一本

さうくんゆきそうへいなのめおくに行説ーく日て説
法ふうけを出てきほみすーるをきくへうはそーくる
ひーよすそーにはくろひ給へさきさに此よの人よりも
えんおもをうーなひくせをそむくらんもなそきを
そうーまん説を今よりなるさ叶ぷんもそ恋ーうちん
此おのこちほーめ次々まそ夜のそんある毎ーとく
口のさ人さまおそひものそ給ももそへひのそひそへ
うへものひ林の内住所そふたっの世給そおのひのよ
人その中ふもおろーせ幼そ叶さまーまる人そそおん
出さまおむさちおつそもおくに婚さまつるものく林

と毎うちさくようすー説よ多ーみくおほおるこ内
はさをはろーおそ恋仏何をふはそてもそえ
おさんちれそるを招引くよおりん人もおんとを
序らんーおこせ給へいかほうちおのそさまりふさ
おつまそおふさふくまさきはーまへるさまのんろう
けある月日もすさりふさのこいのー志得そ給そん
せちおさまそおそさ勢給へんなくにうちロくい給ぞも
あ出いうへいめはろーくうれさおそふおほなて志乃
以そまさくの序つる出もおそーまさ人へそそひく
らーおろそおそーまにくるれいそつのひもおなさを

人（二本）をそのまゐるさ給とも世そぬふかくはめさたまふと
さゝめくあくる春のあさをさくうこをまつるへいまゝ
そうし（二本）もなそ（二本）まの馬ぬこをともちをくおほめ
てへいとうそそくめつくおかへめさ泣くゐさい
さいろのめてたきことかきを引やてもよきやうてん
乃女房ささもゝみそ二りよくまこめよねさ給へ女房ささきふをもちるひぬ中納言ゐ房いふ
ときうつるの房のさきて房男のいきほひといひうへの
房おほそなるひおこのうちへ若ゝみもも給そうくもひ
もなきゐなことをもち給んするとせの人もおそゝむ

殿（二本）もおほ（え二本）つるふおほそぬ人俄なもきくかくおさ泣し
ぬるおくくもちくおほきそうまこくやおへい
とのくそ君へ七なるこのをを殿とせさををまこ給へ
房うんくく中納言ゐ房ゝ仰うきるのおうほへきき
このほのあいきやうへ侍ゑふいとゝし
くおほてゆく泣房そそふおのせおそまこ井之
井（ナシ二本）房うんするきゝむとにをそもむさ（あてゝ一本）ふ人よさうへぬ
をおもをよおほ侍しくあるはうへのひこせ給を
ぬゝまうそ房そそへよませ給くお給をそおそのの
ぬのことへのさまそせ給へへうちうほへおさくおを泣

中納言一本ハ一本
ちゝ君のごとおほえしー本ましてほのかなる
えたるとく涙くゝ落くやそこそせめて辛礼を
まゐらせもてー給よいとくおよさまさとく申ともさめくと一本なくせ
をまふさともさまをもめくおまほまをれとも
くまのせいまさこのくるくさいふ詞をめくて
もくひまくし一本ともくよいまさこおとなくおそ給そ心おもふ
の人をも尋給へてをもめくとまくとうるてさめくと一本
なこのせ給へていとをおろし一本時なさてもくりをなもち
給むくこおほむくさて今のこちのこをこれ給
おほいまくこをも申ともおとくおほめせともを

そまの君のまをおほををもくこのほまくすくまよ
うちほくさまさちうまをまのへをにつくそ九りまこま
くんまくくく侍従なるまよ十一まくかおるくさをを
春まの月もと一のあるくおもくまをせをにけもみ
もくにいとくしみある中まなるこのさにおほえもも
をさをさ辻子くをうふむのさをとうさる世のまつくこ
もむさ中納をもうをおふをあるとなめと世の人をさ
さゆかおるをほくふく。中将よなう給まくのた
おくくをもちのおをくんこ而もくさせまくと神佛ふ
もいのまを給むくまるまや授川ふおもまおとまと

女郎花（たつこめ一本　京一本）　おそまきもこやこんめこのうち
なまつる所いとおいのこゝをは（十七一本）孫あるき終へいあるあん
志ちふ若むしく衣なるおそまりけるこよりくやめ
（てふ一本）
いつゝへは花経をいとゝまりくのにすしくのちふん
ふり十巻んをゝもおそのおくるあやしくおくえ
ふのさのく乃人とをつはさまへは仲納を入をこ終
くいてようをを終とらひるへいおほいとの所まこ中
将なの所山おのもの人ををはゝ終をを申宣生を
ら以人はてよいことゆ名なくくおをはくこ終へ古
所らんをぬとそんをとおくおほしまうはるふかつも

（忍音）

こもしくもおか人のおゝなをとおのふへをふもひの
すとおほしくおいなるへとの終へをいまるふ秋のおを
なるそ手ををふあひるる所（十七一本）なるり乃紅をいい海く
織（ちしー）うのなるなゝしの一本）おさやのかるをを終くはしぬさおそも
をこのくとうでふほむいをまるさゝまをこんさゝまふう
筆のんもをまる中将をまり父の所のほゆりはは
ふいをを入をるへ三人年おをはるを（おゝうんまて一本）はらん（おゝうん）しまいは
（ふ一本）
おなのををふふくはのをこ終をんへをにのそうのる
所さゆのそふをしもふををのまりをふゆてをのふ
（ひもかをの一本）
ふおほをそのへともさゝこのふいてのそおをを終よ西をその

申ふまみなとのをくにのくそもとのそうよう志ゐくおもひるとまりにめさんそくへいおほんくとの給へるふうもつ十まるを給くさふひまふいうよゐゆのうもいむしくをおのよゐを祢ふりもさそおもちなうつるをうれくもをつ祢まるのふそうをこをまふしをそをほとをつまりさものなへ心そのそくしふ今のくくそてまつ辺そてみなうさうむ人いを辺うくさふみのうさいうさとへをはる人まを辺とくに里深乃印神をかにほよなしあてなをまるまは祢ふおくしのそて川もまるせ給をたやなめらひくむそて

忍音

をさふくくそもふ辺とをもそしのいさくうのなうねふもなのうのみおそ申る印なりかくのあそくふ辺いふしくいのそうそ辺る印すうくをもこんをもらんと。神仏よ祢ん年をまつふ美のやうに人のゆ行とふう一本仕つるをやうて志るへまくもしやとまり祢をふまえ一本なうおふおそまりまくをほんふの為のこのなの一本ありに一本ん今ゆて志ゐをもらて十年あまつまうのあひさまの志いけるとのおなさようをもせさもあへ給をひふしくまをほくふまのほう給ふ川うのおさうのそをあまりおそふほそくなうひてみをしふいふとて十すうとのくしくをそうそもそうの

ふうけくさ（一本）ものごろまみ（の一本）をそうもつ（四一本）のをすこそもち乃
あさぢ乃うちふほ（今しも為しき雅忠とふと）ひくるおいさやうふかきて君ていと
よく似（おもひいづく一本）るものへつ（ゝ一本）を所ゐのとの守てとなるもこひ給もよさ
やうてんハ唯今のこゝちいのこゝやゆくゑも春をゆ
ゆおと分やのふうけくさうおもてまりなとまて犬
うつふおとりも給へハさそふのの里こゝろおつとる所
をくせのかお里こゆる我身おくらけくさゆめるそ
とおもせそおもひもてみんもうもちおとろされく
もゐのさわくふそうき世のはかいまるさも分里こさりる
ぬ（ゝ一本）ぬ（ゝ一本）ぬ（ゝ一本）

おのこいろいろ（中初乃一本）もてあそびものしつゝ（十二一本）おくるほどにひのつごもりになりぬれば（中初の一本）としかへりて今のやうおぼえ給ひもちゐまゐるべき（そそ一本）御まへ乃せんさい所らんしつゝおくるほどに（そ一本）おとゝもおぼしめしやるよや所柱をやうしなどまゐるべきふ（中ねちかくまゐるべきよう給ふくいとゞなるおとこ（ナレ一本）はなにかの所山ごもをつゐまつてきいめん給ふをぬと中給へいとゞつゝのなるまゝの引いてふいのみなく（たゝ一本）ひの給へ挟川おもちまいらするすみて給んの柱ふやはなにくかう乃つをを姉うくさおこさ所ありさま（忍音）

夏みをひくもなくくおとゝてなきさ給へをはゝもいまのさら所んこまをおとくそおぼさ（なく所まゐるれ一本）ほどくるさてそのち二位の中納言ふなるべき春こゝろも八まおとふおはしませをいよくうつくしきこのくて所んもおもあくよをたゝち給ともいのにくかいあるまうこんそさせ給へまの次あくるまもを所門をろゐるさせ給へまをめくろゐふはさ給かの中ゐを女院とそ申（それまへる一本）ける中納言殿もおぼされいるのよいおくち中納言とのふ（本給のくおまて一本）ひのへくおりよさまゐてすこし給よをたいの所門を所んふてあるこゝち

いつのたちわの姫君女房ゝまわるを拾ぬ拝納会
とのふものゝ山たちをもきゝ人ちゝ拾くさる人
ものなと（一本なし）法のもしもをりくゝ口つゝさん人をり拾
へるとゝ

八風葉集缺物語歌

もゝいしのゝくつをなくさまふこゝをもつをくなとゝ

秋上

七日のつまをせをる　志のむ拾のさいかとの事ゝの
今日さへやこゝにくゝさんなきゝのをゝ表ハ志のよふにせつて
せもうゝ思ハゝる女さんよもあゝ拾ゝ毛ゝこゝろ
ゝなゝとをもむんとゝくゝいゝさゝのきゝちうて

雑三

志のむね（一本ふゝ）乃中将
りまを行ちきうゝんゝ思ハゝるゝいちふさのかゝをゝる世を
ほゝいとゝくゝのちおゝ人のきよふさゝ世の世
きる

丹鶴叢書目錄

丁未帙

正中御飾記一卷

内宮御神寶記一卷

右二部原本丹鶴書院藏

後水尾院當時年中行事二卷

右原本村田春野藏

春記三卷　同裏文書

右原本中山備前守信守朝臣藏

九條右大臣集一卷

御堂閑白集一卷
右二部原本丹鶴書院藏
藤原家經朝臣集一卷
右原本仲田顯忠藏
和泉式部續集二卷
右原本井上文雄藏
源重之女集一卷
小侍從集一卷
朅富門院大輔集一卷
右三部原本仲田顯忠藏

風尒津連奈幾物語一卷
右原本新見伊賀守正路朝臣藏
已上捴十二部十五卷或分或合為十一本

戊申帙
釋奠供物圖一卷
諸陵雜事注文一卷
雜筆要集一卷
右三部原本村田春野藏
春記十一卷

右原本松平越中守定猷朝臣藏

室町殿春日詣記一卷

右原本村田春野藏

掊弓藤割次第一卷

諸鞍日記一卷

九條家車圖一卷

西園寺家車圖一卷

右四部原本田口千頴藏

萬代和歌集二十卷

前參議教長卿集六卷

濱松中納言物語四卷

乙寺緣起一卷

右四部原本丹鶴書院藏

已上揔十三部五十卷為三十九本

乙酉帙

侍中群要十卷

右原本松岡明義藏

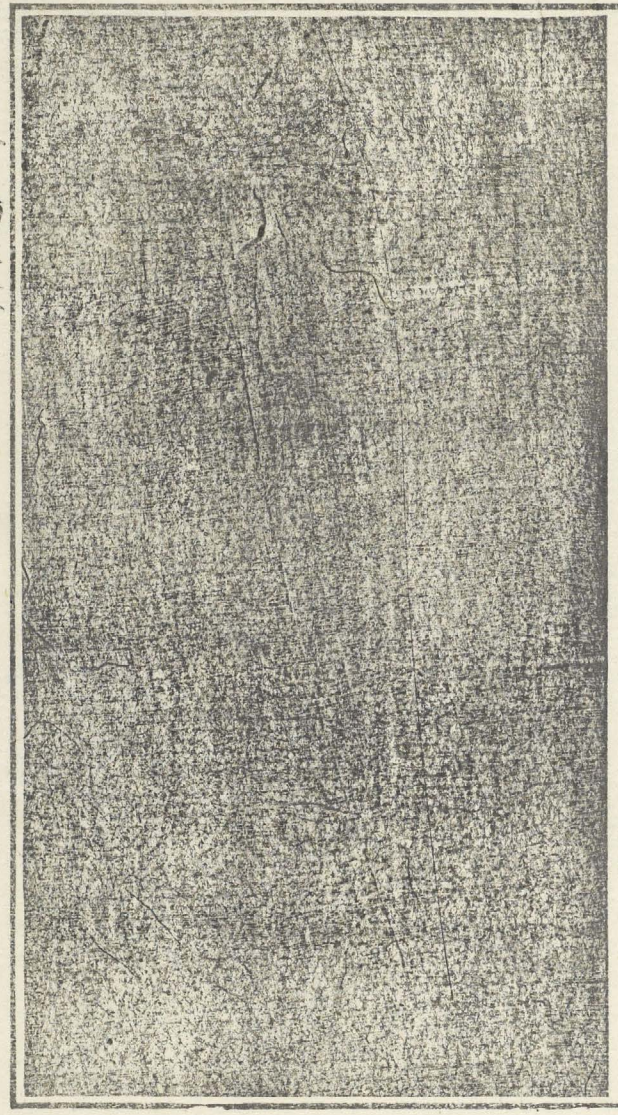
信實朝臣集一卷

草根集十五卷

右二部原本丹鶴書院藏

繪師草紙一卷
右原本小田切直蔵同人縮写之
蒙古襲来繪詞三卷
右原本高島千春蔵同人縮写之
已上捴五部三十卷為二十四本

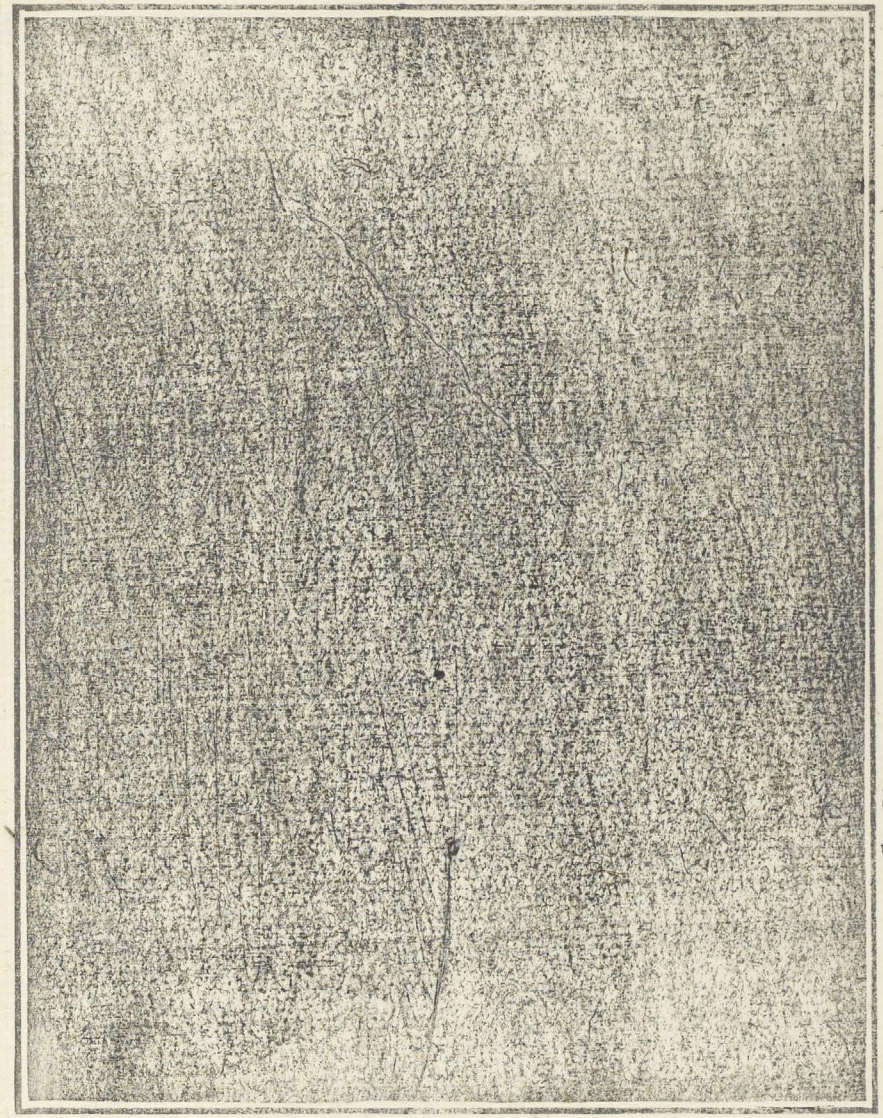
庚戌帙
三中口傳五卷
今昔物語自第廿二至第卅一十卷
忍音物語一卷
右原本丹鶴書院蔵



已上三部十六卷為二十七本

辛亥帙

嗣刻



丹鶴城藏梓

賣弘所
三都書肆

京都三条通弁屋町　出雲寺文次郎
大阪心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門
江戸芝神明前　岡田屋嘉七
同鍛冶橋五郎兵衛町　中屋徳兵衛

